



## 第拾卷第四號



見送りし人の霞みて岡の松  
 種蒔や山吹折つて菜草  
 爐塞でまだ膝に乗る小猫かな  
 春雨の庭や若松若みどり  
 摘草や蝶追ふ妹の余念なき  
 山吹や茶垣を添ふて雨を咲き  
 老僧のよき日撰みて接木かな  
 座布團を枕に蛙聞く夜かな  
 そこくに汐干戻る小雨かな  
 鳴く田螺水田の闇の美しき  
 春雨や机の上の七部集  
 春の旅大津も近く馬の鈴  
 永き日の舟引き上げる工夫かな  
 菜の花や野寺に稀な鐘供養  
 小雨降る小庭に菊の根分かな  
 三里ほどガタクリ馬車や桃の里  
 春雨や旅の日記の自畫自賛